

次の文章は書家で京都精華大学教授の石川九楊氏の講演録である。よく読んで、「縦」と「横」のイメージに関するあなたの考えを自由に述べよ。ただし、600 字以内で書くこと。

皆さんは本日の講演のタイトル「縦に書け、縦に考えよ」をお読みになって、「一体何を言わんとしているのか」と訝しくお思いになったかもしれません。数学的に言えば、九〇度回転すると縦は横になり横は縦になります。事実、若い学者が『横書き登場—日本語表記の近代』（屋名池誠著、岩波新書）という本を書いています。基本的には、「縦も横も一緒」という発想です。

しかし実際には、縦を九〇度回転させても横にはなりません。印刷活字で一般的な明朝体をよく見ればお気づきになると思いますが、縦画が太くて横は細いです。清の時代に卓越した書論を残した笈重光は、「筆の執使は横画に在り。字の立体は豎画に在り」、つまり、「筆の運用による文字のバリエーションは横画が作る。それに対し、縦画は文字を立ち上げる」「文字の横画と縦画は役割が違う」と言っているのです。(中略)

さて、学生達に「文字は何に書きますか」と尋ねると「紙に書きます」と答えます。「では書いてみて下さい」と、私が紙の上部をつまんで持ち、そこに文字を書かせようとしても、土台が定まらず書けません。この時、紙は単なる紙切れのままです。

次に、学生達に「机の上に紙を置き、その上に“天”という字を書いて下さい」と言うと、学生達は紙の中央より上の部分に“天”と書きます。しかし不思議なことに「紙の上に鉛筆を置いて下さい」と言うと、彼らは紙のほぼ中央に鉛筆を置きます。つまり、文字を書きつけようとする瞬間、紙は単なる紙ではなく、現実の世界とは別の「天と地を持つもう一つの世界」へ転化するのです。文字の書かれた紙は、逆さまにしても天は天であることから、もはや独立した世界です。作家などが書いた詩や小説を、「文学の世界」と表現することがありますが、その根拠は、「紙とは、文字を書かんとした瞬間、現実とは異なるもう一つの世界になる」ということからきています。

更に言うと、学生達が文字を書いたのは紙切れではなく、「力を加えればそれに抵抗して支えてくれるもの」に対してです。要するに「対象世界」に対して書くのです。

(石川九楊講演録「縦に書け、縦に考えよ—縦と横の文化学—」『學士會會報』No.894 より)